私の大阪ビギナー適応記　　パク・コウン　　ミレ参考訳

私たちは大阪に住むことを決心し、2011 年 9 月に大阪入りを果たした。2011 年は日本にとって胸の痛む出来事があった年なので、そんな時期に日本に行くというものだから、家族皆の心配は並大抵ではなかった。2 度と会えないかのように泣いたが、私たちは心配を背に旅立ち、たちまち日常を取り戻した。

その後、ここで知人からとても親切な家主さんを紹介してもらい、大阪の南部に住まいを定め、定着への 1 歩を踏み出した。

エピソード 1

大家さんが、郵便がちゃんと届くように表札を出すのはどうかと言うので、私たちは手作りの表札をかけた。

ある日、夫と買い物をして家に帰る途中で、2 人のおばあさんが、家の前で立ち話をしているのを聞いてしまった。

「ここ、朝鮮人が住んでるね」という……

その後、私たちは大家さんに事情を話して表札をはずしてしまった。

おばあさんたちの時間は、いつの時代で止まっているのだろうか？

エピソード 2

運良く、ある会社に就職が決まった。

日本では、留学時代に飲食店のホールのアルバイトしか経験がなかった私にとって、事務室に座って電話で注文を受け、仕事を処理するのは容易ではなかった。

受話器越しに聞こえてくる言葉を聞き洩らさないために脳をフル回転させ、毎日、目の下のクマが顎まで下がってくるほどだった。

あるとき、大阪弁がすごくきついおじさんが、いきなり「これ、ナンボヤ？」と言ったのだ。

本で日本語を勉強した私に方言が分かるはずもない……。生まれてこの方、一度も耳にしたことのない「ナンボヤ」とは一体何なのだろうか？　3 秒間の沈黙ののち、私はおじさんに聞き返した。

「ナンボヤってなんですか？」

エピソード 3

初めての子が生まれ、なんとか一人でも子どもを連れて外出する勇気が出たころ、私はベビーカーを押して、近所のスーパーに向かった。スーパーの入り口にはマクドナルドがあるのだが、フライドポテトの匂いがいつも鼻をくすぐった。

私は子どもがぐっすりと寝入っているのを確認し、注文したものを持って、近くの公園の

日当たりのいいベンチに座った。一人だけの時間を満喫しながら、ポテトを口にしようとしたその瞬間、誰かが話しかけてきた。背中に冷や汗が流れる思いがした。

いったい私の時間を邪魔するのはどこのどいつだ？　と心の中で思いながら顔を上げると、満面の笑みを浮かべたセールスマンだった。

まぁ、そうだよね……。笑う顔に唾は吐けない……

「ニ・ホ・オン・ゴ・ワ・カ・リ・マ・セ・ン」と、どうにかこうにか、たどたどしく口にする演技をした。セールスマンのおじさんは困ったように「すみません」と謝り、他のターゲットを探しにいそいそと立ち去って行った。

ふぅ〜、私の演技に引かかったね。ごめんなさい、おじさん（笑）……

私の大阪生活は今年で 15 年目。まだまだ適応中だが、明日が楽しみになるような、充実した今日を生きながら、いつもこのすべてに感謝する気持ちを忘れないでおこうと、自分自身に言い聞かせる。